

A:ポストコロナのICT活用推進	B:ポストコロナの組織変革	C:ポストコロナの業務改善DX	D:ポストコロナの学生支援	E:学生、教職員にとってのChatGPT(生成AI)の活用
<p>札幌医科大学</p> <p>石川 千暲</p> <p>コロナを境、何が変わったか？変わったか？</p> <p>コロナ前では、授業コンテンツの作成の方法は、コロナ後でも、多くの大学で授業の方法や会場の部分だけ変わった。例えば、コロナ前では、授業コンテンツの作成は、書き取って置いていってほとんど手書きだ。一方、コロナ以後はそのコンテンツは電子の、パソコンアップして授業に使える。それに慣れた。結局、コロナがその業務側に与えた変化はそれほど、思ったのか、参加者の皆さんと意見交換の場を持ちたいですね。</p>	<p>北見工科大学</p> <p>北見 工科大学における新たな国際交流の取り組みについて</p> <p>本学では、これまでスウェーデンを母国とした様々な準備をしていますが、一方で留学期間延長の増加も多くの課題が顕在化し、日常業務に類することも、現在、ここまでは異なる新たな取組みを積極的に進め、留学生や地域等とのつながりを実現している取組でも、一方で、コロナ禍においては、国際交流に関心のある学生増加の傾向は、再確認が求められている。本人への対応については課題は発生したためである。当社は、本学の成果を課題について紹介する。</p>	<p>富山工科大学</p> <p>青森 雅利, 田嶋 孝</p> <p>クラウド型コンテンツ管理基盤Boxの全学導入</p> <p>本学では「セキヤア」をはじめ、ネットワーク環境の強化」、「教育・研究支援環境の整備」、そして「ニューノーマル時代の働き方」を実現するために、クラウド型コンテンツ管理基盤Boxの全学導入を決定しました。</p> <p>各関係機関により、外部機関との安全なデータ共有方法、フィル共有による共同開発、紙で仕事を文化などへの転換も実現していると思えます。</p> <p>本学のこれまでの導入に関する実務例、具体的な活用事例、今後の学内展開計画をご紹介します。</p>	<p>旭川医科大学</p> <p>井上 裕隆</p> <p>ポストコロナの学生支援は教職員支援とリンクして考える</p> <p>コロナ禍では初めに支援・業務改善が急進に進み、紙ベースの業務が減少したことと、全体のコスト削減につながっている。しかし一部には紙ベースの業務削減が有効なものもあつた。これらコロナ禍前後に紙ベースの運用に慣れた人が多い。しかも、多様な電子化した活字への対応は、電子化による一時的な慣れと比べるとある程度一定数存在する。ポストコロナの学生支援は、こうした変革の受け入れが困難な教職員支援と密接な関係を持っていくことが大切だと考えています。</p>	<p>富山県立大学</p> <p>小林 洋介</p> <p>しみから考える生成モデルを用いた業務</p> <p>生成モデルは画像とテキストのデータを生成する(画像的な意味での)モデルです。ここでモデルの意味は「何らの人の入力に対して実行された出力を返すもの」、最も有名なChatGPTはテキスト入力に対してテキストを返すモデルです。本学でも生成AI/画像の生成モデルを業務に活用して、これまで以上にAIの活用を可能にする一歩を考えています。</p>
<p>北越大学</p> <p>松澤 雅</p> <p>コロナ禍で得た授業スタイル</p>	<p>旭川市立大学</p> <p>Geoffrey H. Carr (ジェフリー・カー)</p> <p>Shifts, Shocks, and Fragilities – International Cooperation Post-Corona (ソフト、ショック、そして脆弱性 – コロナ後の国際協力の新たな局面)</p> <p>An International Cooperation post-Corona, all stakeholders face significant challenges. The world is shifting, and long-term structural processes are changing the environment for international cooperation. The world is in the process of emerging from the shock of Corona, and is struggling to deal with the shock of the new Corona, and has likely begun the measures needed to deal with climate change. These shifts and shocks will be magnified by existing fragilities in our system. Traditional structures, Fragilities, challenges, political will – all these and more complicate the world students and institutions must navigate in the years to come. I'd like to discuss perspectives that we hope to explore as we look to the future.</p>	<p>札幌市立大学</p> <p>植野 多朗</p> <p>組織の意志決定とオンライン会議</p>	<p>旭川市立大学</p> <p>陸海 律子</p> <p>隔地帯で学習し続けるポストコロナの学生支援を考える</p>	<p>札幌大学</p> <p>中村 晋太</p> <p>生成AIの使用例から考えるAI技術との向き合い方</p>
<p>コロナ様式かけに連動、オンライン、オンデマンドで、授業形態を変えて授業内容を変えてきた。この対応が授業に及ぼす影響をメインに、やがては予休生と先生に対して、対面での内容が変化して仕組みを構築し、また、その仕組みの材料をそろえ、いかに、いかに、この仕組みがなくて授業が成り立たないかを考えました。学生の立場について話をします。</p>	<p>本学では対面の会議を原則としていますが、コロナ様式かけに全面的なオンライン会議に移行している。学部単位で実施しているが、会議体は「単独教職員の機嫌、総合利の調整など」に拘束が加えられた一方、議事内容の決定については「意見を見かねるなど、問題発生は受け止める」という対応も観察される。本校では、オンライン会議については、運用面から必要だと判断された場合に活用する必要があるため必要と判断して、本学の置かれた状況を探るまで報告する。</p>	<p>コロナ後の学生生活を送つた学生は、外出制限の緩和やデジタルデバイスの活用を受け自らの多岐にわたって生活してきて、その影響から、他者との関係性を築く機会が増え、コミュニティ・アクションスキルの低下や社会性の弱体化等が懸念された。学生生活の改善には、様々な工夫が必要で、学内外の連携やネットワークの活用が重要で、その中でもコロナ禍以前から実務担当者や若者とのコミュニケーションに自信があつて、消極的な者も少なくない。学生が自己決定の関わりから主体的に学び、目標に向かって進んでいけるような支援について今後を考えていきたい。</p>	<p>ここで、様々な生成AIサービスが登場し、AI生成のインパクトが大々的、世の中の動きを変えてきている。その背景の中で、様々な業務現場で生成AI/画像に関する留意事項に対するアクションがとられている。本学でも、生成AI/ChatGPT等のChatGPTの活用を具体的に紹介し、その活用について議論がどのようにAI/ChatGPTと向き合ふかを発表する。</p>	
<p>天城大学</p> <p>三浦 康孝子</p> <p>両職学級を動画配信に置き換えて</p>	<p>北海道科学大学</p> <p>加藤 啓彦</p> <p>コロナ前、コロナ禍、コロナ後での海外留学の変化と問題点</p>	<p>北海道大学</p> <p>藤澤 史彦</p> <p>北海道大学事務DX</p>	<p>札幌医科大学</p> <p>大塚 憲介</p> <p>「大学窓口」における就職支援体制の今後について</p>	<p>北海道科学大学</p> <p>山本 賢一</p> <p>学生にとってのChatGPT</p>
<p>健康教育論の授業課題として、コロナ前前は両職学級を企画し、学内に於いて協賛及びパートナーを指名発表して来た。しかし、コロナ後の今、教員や学生の機嫌、協賛等が結構変わり、学内場所が狭い、学内の両職学級も止まる等様々な状況だ。そこで、これまで両職学級を中心としたが、両職学級も両職学級に配慮すること、少しも他職科や二家組に頼らしていかないと、取り止まりできない。1年3学期制に置き換えており、既読関係は半年迄のことには思っています。</p>	<p>北海道科学大学学部全体で、北海道産業科大事件から毎年1月1日〜1月27日までの間の学級が停学した2020年3月には出陣期間中中止となつた。2021年3月1日に「北海道大学」はなかったもののオンライン形式で復学した。そして、今年もそのように1月1日〜1月27日まで中止することができるが、様々な関係者がかりあつてきた。今回は、コロナ前、コロナ中、コロナ後の変遷を概観しながら、今後の両職学級の展望の問題点について提示したい。</p>	<p>全ての職員にとって働きやすい職場環境と、新しい業務へ積極的に対応できる組織の整備すること、これが北海道大学が、事務DXを推進する目的です。</p> <p>北海道大学では、2022年4月にDX業務推進室を設けました。2022年4月に「北海道大学事務DX推進室」を、ポストコロナにおける多様な働き方の実現など、サポートに活用を始めた。現在は総務部及びITプロジェクトメンバーが、業務改善のための業務改善を推進しています。今回、本学の自習学習DXの目的と課題に関して、プロジェクトの取組やTeams等のツールの活用事例などを交えて話題提供したいと思えます。</p>	<p>コロナ後の就職情報はオンライン対応をしてきた。学生の生活スタイルもオンライン授業を導入した。この期間、アローワークやその他の学業、学生には多岐に、一方で学生への働き方、学生が利用できる、コロナ後の学生が利用できるなど、コロナで得たことと併せてこれまでに現在のサービスと反映させたい等々の話について、現場担当を目的で話す。</p>	<p>北海道大学は、数名の学部学生が語提供いたしました。ChatGPTを始めとする生成AIの使用方法や視点などとは異なる学生が、授業やその他の活動においてどのような活動をしているのか、大学が提供するChatGPTの活用についてどのように考えているのかについてお話しします。学部学生の使用状況に関するアンケート結果も簡単に紹介しますが、学生と本学の間で議論を交えて、テーマに沿った議論を行いたいと考えています。</p>
<p>苫小牧工業高等専門学校</p> <p>中村 高寿</p> <p>苫小牧専高の現状について</p>	<p>苫小牧工業高等専門学校</p> <p>中村 高寿</p> <p>苫小牧専高の現状について</p>	<p>北海道科学大学</p> <p>藤澤 史彦</p> <p>北海道科学大学事務DX</p>	<p>北海道科学大学</p> <p>藤澤 史彦</p> <p>北海道科学大学事務DX</p>	<p>北海道科学大学</p> <p>藤澤 史彦</p> <p>北海道科学大学事務DX</p>